

後継者

弟子：親方すいません、私は湯守の仕事やっていけません。やる気がなくなりました。

親方：あ、まって、まってくれー！聖一ー！  
行っちゃった。唯一の後継者だったのに。はあ、またこれで一人でやることになるのか。

居酒屋おやじ：喜代治さん。喜代治さん！

親方：ん、ああ、おやじ、人気一もう一杯

居酒屋おやじ：喜代治さん飲みすぎだよ。

親方：そら飲みたくもなるよ。どうもこの湯守って仕事は後継ぎが見つからねえんで、困ってるんだよ。この温泉地の湯を守らなくてはならねえ仕事なのに今は俺一人でやってる。この間も、そんなに重要な仕事ならやらしてくれって来た奴が三日もたたず逃げ出しやがった。  
どうしてこうなるかね。

居酒屋おやじ：まあ、そら仕方ねえな。何しろ過酷な仕事だもの

親方：タダな、この前来た聖一は、近頃の若者にしては芯のあるやつだと思っていたのに、あいつもやる気がなくなったなんて下らない理由でどっか行っちゃった。

居酒屋おやじ：聖一が？そうかい。でも案外、ヤル気とは別の部分でやめちまったのかもしれないねえな。

まあ、そんなに考え込むこたあねえよ。でもね、本気で後継者を集めたいと思うなら、失敗を恐れちゃいけないよ。なんでも思いついたことはやったほうがいい。  
とにかく今どきの若者に受けるようにやらなくちゃあいけねえ。

親方：おめえ、今どきの若者知っとんのか。

居酒屋おやじ：あたりめえだ。俺にもバンドで全国行脚してるせがれが二人いるんだ。今どきの若者ぐらい知ってる。

親方：じゃ、今どきの若者ってのはどんなもんだ？

居酒屋おやじ：今どきの若者ってのはな、楽しんで稼ぎたい、やりがいはほしい、もてたいこれだ。

親方：そうか分かった。楽しんで稼げてやりがいもあり、女にもてる。これで広告を作るぞ。

さあ、喜代治さん思い立ったが吉日ってんで、すぐに手製の広告を刷りまして、自慢の健脚で福島県中に配り歩きます。

若者1：なんか家に変なチラシ届いてて、楽しんで稼げるとか書いてあってさあ。

若者2：そう、それ家にも届いてた！楽しんで稼げる、やりがい十分、女にもてる知られざる夢の職業、湯守。これ気になるな！ちょっと岳に行ってみるか！

ポスティングの甲斐もあり、若者が何人か集まってまいりまして。まず家に集まって説明会が行われまして

親方：私が唯一の湯守の喜代治です。湯守という仕事はこの岳温泉になくてはならない仕事です。そのため、この町内でも一目置かれ、尊敬されている存在でございますな。

若者：おい、尊敬されてるっていう割には掘っ立て小屋みたいなところに住んでるな。

若者：すいません！楽しんで稼げるって見てきたんですけど本当ですか？

親方：もちろん。冬場は一週間に一度の業務で十分。吹雪の時は休みです。それでも全く食うに困らない。

そのうえ自然を感じながらできる仕事だ。どこまでも白い雪原、野生動物、生い茂る木々、この仕事でしか見られない景色というものがあるな。

若者：確かにそんな大自然見たことないな

若者：あの、じゃあ、も、モテるってのは

親方：ああ、当然皆憧れの職業ですから、私も70になりますが、女に困ったことは一度たりとも無い。

若者：あの、あこがれの職業なのにどうして爺さん一人なんですか？

親方：さあ、ここで話してもわからない。早速湯守の仕事を見てもらいましょう。皆さん支度を

若者：どうして一人なんですか？

親方：支度をしましょう。

若者：一人の理由を

親方：さっさとしろ！ぐずぐずしてると緑が池に沈めるぞ！

さあこれから山を登り源泉を目指します、岳温泉のお湯というのは、源泉からパイプを伝って各温泉宿に配られるのですが、その全長が8キロメートルございます。この8キロのパイプの点検・洗浄というのも湯守の仕事で、一定間隔に空いている点検穴から道具を使って結晶化した温泉成分をこそぎ落とすのですが、冬は4メートル積もった雪を掘らなくてはいけないというまことに過酷な作業でございます

親方：おーい、早くこっちこーい！

若者：さっきまで晴れてたのに風がすごい。雪も降ってる。なんでこんな中歩かなきゃならないんだ。あの、これのどこが楽なんですか？

親方：これぐらいの雪がなんだ。町から源泉までたったの8キロ、安達太良山の標高もわずか1700メートルだ。会津磐梯山が1800メートルだぞ。それと比べたら、ずいぶん楽だろう

若者：え？楽ってそういうこと？

親方：ここはな、雪で道がわかりにくくなってるから気を付けて。右側は崖だ。足を滑らすと助からないからな。

若者：助からないって、そんな命がけの登山のどこが楽なんだよ。

親方：崖から落ちたらもう助からない。落ちたものを助ける労力が省ける。楽だな。

若者：おい落ちたら見殺しかよ、ますます落ちられねえじゃねえか。

親方：ほら付いた。ここに杭があるだろ。この杭がパイプの点検穴の目印になつとる。目印があるなんて、楽だな。

若者：いやいや、楽って言ってますけどこの雪を掘って開けなきゃいけないんでしょ。全然楽じゃねえよ

親方：何を言つとる。まったく目印なく真っ白な中あちこち掘り返していくのと、目印を頼りにやるのとどっちが楽なんじゃ！

なんだ、まだ不満か。よし仕方ねえ、じゃあこれはとっておきだ。雪掘れる男はモテるな。いやいや、本当だよ。俺も昔はモテなくて悩んでいたが、この湯守の仕事について雪掘りが上達すると、みるみるうちに言い寄られるようになった。喜代治さんこっちの屋根お願い、喜代治さんうちの前の雪かき終わらないの。どうだこのモテようは。

若者：それいいように使われてるだけじゃねえのか？

親方：いいから、この杭を目印に穴ほってくからな。いいか、杭の脇に立って、まず3歩前に進む。で、直角に右に曲がって2歩歩く。そうさそうさ。その位置が大体点検穴のある部分だ。

若者：ここ？ほりゃいいのか

親方：バカまだ掘るな！死にてえのか！

若者：え？しにてえのか？

親方：人の話聞く前にやるやつがあるか。点検穴の周りは温かいから雪がそこだけ溶けて空洞になつとる。真上から穴掘ってそこの穴に落ちると硫化水素の中毒で死ぬ

若者：ちょっとちょっとえ？死ぬんですか？やっぱりそうさ命の危険があるってことじゃないですか！どこが楽なんですか！

親方：ああ、硫化水素ってのは色もなければにおいもない、だから気を失うようにずっと死ぬな。だから楽に死ぬ

若者：どんなに楽でも死にたくないですよ！どうするんですか？

親方：今向いてるほうの左に直角に曲がって、三歩歩いて、そこから斜めに穴を掘ればいい。そいでガス逃がしてから作業すりゃあいいだよ。いや、おめえはそこにいて構わねえ、俺が穴掘る処見ておきな。

若者：ははあ、さすが言うだけのことがありますね。どんどん掘っていくよ。

親方：ふん！ふん！

若者：うわすごい！ちょ、ちょっと！雪かかっていますよ！掘ったの全部かかっています

親方：ふん！ふんふんふんふん！

若者：夢中で掘ってるから見えてねえんだよ。ちょっと爺さん！

親方：おう、ん？ずいぶん真っ白けじゃねえか。そんなに吹雪いたか？

若者：冗談じゃねえよ、爺さんのまいた雪がみんなかかっていたんだよ！

親方：ははは、そうかそうか。見てみる。これが点検穴だ。ここから道具入れて掃除するんだ。今上がるから待ってろ。

よし、次の杭行くぞ。

若者：え？まだ行くの？

親方：当たり前だ。点検穴から点検穴までたわしを通さなきゃならねえ。今掘ったのが始点だ。次はあれの終点を掘る。

さあ、ここだ。今度はお前だ。杭の前立て。

いいか、そこから15歩歩いて、右向いたら32歩歩け。ついたかー。そこが点検穴の位置だー。

若者：こんなに遠かったら目印の役割果たしてねえじゃねえか！

親方：そらまだ近いほうだー。別の杭は左に146歩、左向いて杉のき6本超えたところに点検穴があるー。

若者：いくら何でも遠すぎるー。

親方：杭から点検穴の位置も覚えるんだぞー。そしたら楽になるー。

若者：今ここに杭さしゃもっと楽だろー。

親方：それは面倒だ。

若者：どっちが面倒なのかわからなくなっちゃったよ。穴掘りどうするー！

親方：ああ、おめえにはまだ早えから、俺が掘りに行く。

よ、ほ、ほいほいほいほいほ、あ！

若者：爺さんどうしたい？

親方：スコップを穴に落としちまった。

若者：穴って、さっきの毒ガスがたまってるってあなか？どうするんだよ。

親方：心配するな、こういう時はな、

若者：こういう時は？

親方：息止めて取ってくる！

親方：はあ、はあ、はあ。

若者：大ベテランがこんなにくたびれてるよ。

親方：よし、掃除も終わったことだし、あなあ埋めて戻るぞ！  
帰り道も滑り落ちねえようにな。落ちたら死んじゃうから。

若者：また脅してやがる。

親方：さあ、町に戻ってきた。今日は比較的穏やかな天気だったからより楽なほうだったな。

若者：あれで？

親方：ああ、でも今日は教えながらやってたから少し作業が残っちゃった。だから明日も同じような…あれ？お、おいー！蜘蛛の子散らすようにいなくなっちゃった。。

弟子：あの、親方

親方：聖一か、何しに来た？

弟子：親方この間はいろいろ言って飛び出してしまっただけです。もう一度湯守やらせてください！

親方：お前、どうして？やる気が枯れたんじゃないのか？

弟子：はい。何しろ俺は不器用で物覚えも悪いですから、杭から点検穴の位置を覚えるのも遅いし、雪かきも早くならない。親方に迷惑かけてばかりで申し訳ないと思っていたんです。役に立ちたいと思うのに思うようにできない。自分への絶望感から、ついヤル気がなくなっただけで口走って飛び出しちゃいました。

親方：でもおめえ、どうして思い直したんだ

弟子：はい、もう湯守もやめて岳の地も離れようと思ってました。でも、お世話になった飲み屋にはあいさつに行かなきゃいけないって思いまして、萬屋に行きました。そしたら、おやじさんが一杯飲んでけって言うんで、断り切れず飲んでいたら花かんざしの女将が来まして、今申し上げた愚痴をこぼしたんですよ。そしたら女将が、「あなたは立派な湯守に違いないけど、温泉のもとにしか目が行ってない。もっと、温泉が流れ着く先を見てみたらどうかしら」って言うてくれたんです。いわれてハッとしました。おれ、源泉を守る親方についていくのに必死で、湯の行き先の温泉街に目を向けてなかったんだと気づいたんです。次の日に町を歩いてみて、楽しそうな観光客の人たちや全力でもてなす旅館の人たち。その根本には親方と、俺が守ってる湯があるんだって、そう思えたんです。そしたら、なんだか自信を取り戻した気がして。また湯守をやりたい。いや、やらなくちゃいけないってそれで、恥ずかしながら帰ってまいりました。親方すいませんでした。どうかもう一遍おいては頂けないでしょうか？

親方：そうか。俺は教えるのがうまくねえからよ。湯の配合もずっと自分でやってて、おめえには雑用ばかりさせてきた。それが嫌でやめたのかと思ってたよ。

弟子：いや、親方そんなわけねえよ。おれ、親方の背中見て、湯守の仕事覚えてんだ。親方の背中では教え上手だ。

親方：生意気なこと言ってやがる。おう、今度、湯の配合やりなよ。

弟子：親方。ありがとうございます。

それにしても親方、この岳温泉には、温泉街にも源泉がありましたよ。

親方：何言ってんだ、岳の温泉はみーんな安達太良山から引っ張て来てるじゃねえか。

弟子：いや、そうじゃねえ。やる気の源泉がここにはあるんだ。